

笑顔のために



ダナン外国語大学で日本語を学ぶ学生

語学教育・昔と今

2016年3月末からダナン外国語大学に派遣されている。この大学は国立ダナン大学の系列下にあり、正式にはダナン大学ダナン外国語大学という。ここでは日本語の他に英語、フランス語、ロシア語、中国語、タイ語、韓国語と7つの言語が教えられている。この中で日本語学科は最も人気が高い。その理由としては、子供のころから日本のアニメに親しんだこと、在学中に日本食レストランや日本企業でアルバイトができること、日本の大学に留学したり、4年次にはインターンシップとして日本で働くチャンスがあること、卒業後は市内の日系企業で働くチャンスがあること、そこでの給与はベトナムの平均給与より高い、といった実利的な面が考えられる。また、政治的には南沙諸島の領土問題などで中国との関係が悪化し、頼れるのは日本というムードが広まり、日本製品が信頼されているように、日本国が信頼されていることも考えられる。このようなことから、市内には民間の日本語学校がたくさんあり、まさに日本語ブームだといえる。

赴任して最初に驚いたのは、担当時間数が週27コマ（1コマ50分）と言われたことである。日本での教師時代、最も多い時で週18コマであった。その後、オーストラリア、インドネシア、モロッコでの担当コマ数は常にそれ以下であった。若い時だったからこそできた18コマ。66歳を過ぎた高齢者にとって27コマという数字は脅威であった。若い時であれば当然文句を言ったであろう。だが、現状を知るとそうはいかない。修士・博士課程を取るために

日本に留学しているベトナム人教師が5名もいて、そのしわ寄せは残された教師にあり、私も頼りにされているからである。

次に、どのクラスに入った時も「先生、おはようございます。よろしくお願ひします」、最後は「先生、ありがとうございます。さようなら」と大きな声で深々とお辞儀をされる。日本では「おはようございます」とは言っても「よろしくお願ひします」とまでは言わない。ベトナムでは小学



校からこのような習慣があるようだ。今まで教えた海外の国々では起立も礼もなかったので、新鮮でいつも真剣勝負のような気合と気迫を感じる。

学習方法にも昔に比べ大きな変化がみられる。まず、辞書を持たないことである。ほとんどの学生がスマートフォンの辞書アプリを使っている。大きな辞書は持ち運びに不便だが、これだと軽くてどこでも使えるのでとても便利である。また、黒板に書いて説明してもノートに写さない学生が多い。スマートフォンのカメラで映してい

るので、書くことより聞くことに集中できるので、これも便利な道具であろう。教師はプロジェクターを使い、学生の課題はEメールで送られてくる。このように昔と比べ、学生の学習方法は便利に効率的になってきている。コンピュータを使って自分ひとりでも勉強できる。事実、興味のあることをインターネットで調べ、結果的に日本語能力が高まっている学生が増えている。アニメから日本語をマスターした人も現れている時代である。教えなくても自分で学ぶのだから、教師ってなんだろうと考えざるを得ない。

教師は本来知識を伝えることが仕事であるが、教師主体の一方的な授業には限度がある。学生が主体となり、自分から進んで学ぶことで、その知識は生きたものとなり身につくもので、教師にとっては、適切な助言を与えるのが理想的な教育といえるのではなかろうか。私は本校職員と協力し、学生が自立学習のできるような環境作り心がけている。これまでの教師生活で様々な学生に接し、楽しい思い出を作ることができた。そして、最後にここでは自立学習のできる学生たちにも出会ったことを大変うれしく思う。

●プロフィール

若林秀明（わかばやし ひであき）

JICA シニア 海外ボランティア。日本語教育。出身は岡山県、オーストラリア在住。埼玉の県立高校で英語教師を10年間。その後オーストラリアの大学で日本語を教える。退職後はインドネシア、モロッコ、ベトナムの日本語教育に携わり、今回で3度目のJICA シニア海外ボランティアをしている。

